

立正大学博物館 第4回企画展

立正大学

のあゆみ

RISSHO 135



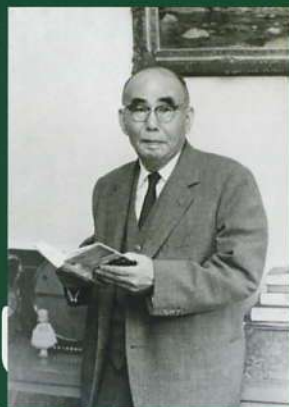
RISSHO 135



RISSHO 135



1900
→



1950
→



2000
→



立正大学博物館
2007

ごあいさつ

平成 19 年度の第 4 回企画展として「立正大学のあゆみ」を開催いたします。

立正大学はその淵源を下総国飯高郷（現千葉県匝瑳市飯高）に所在した飯高檀林に求めることができます。天正 8（1580）年に日蓮宗の教育・研究機関として創設された飯高檀林は、明治 8（1875）年の廃止に至るまでの 295 年間、関東に置かれた八檀林の中の大檀林として多くの学僧の教育を行い、社会教化・仏教文化の興隆などに活躍した数多くの人材を輩出してきました。そして、明治 5（1872）年 8 月に芝二本榎の承教寺（現港区高輪 2 丁目）の境内に「日蓮宗小教院」が設置され、飯高檀林の理念と伝統を継承し、立正大学の前身として新たな出発を果しました。

その後、明治 37（1904）年に専門学校令による「日蓮宗大学林」を大崎に設立し、大正 13（1924）年 5 月 17 日に大学令による「立正大学」の設立認可を受け、今日の立正大学へと受け継がれました。昭和 42（1967）年には新たに熊谷キャンパスを開校し、現在 8 学部 14 学科 7 研究科からなる総合大学と発展しています。

立正大学は今年、二本榎の承教寺に日蓮宗小教院が設置されてから 135 周年を迎えます。平成 19 年から熊谷キャンパス再開発事業が、また大崎キャンパスでも順次施設の増改築が進み新たな転換期を迎えています。そこで、今回の企画展では、立正大学の歴史を振り返り、どのような過程をあゆんできたのかを確認し、あるべき立正大学の将来像を考える機会にしたいと思います。

平成 19 年 7 月

館長 池上 悟

目次

ごあいさつ

- 1.立正大学史
- 2.日蓮宗大学林の設立について
- 3.立正大学の校歌
- 4.立正大学のあゆみ

表紙の写真

- | | |
|----|---|
| 上段 | 左...飯高檀林講堂
中...講義風景（昭和初期頃）
右...現在の熊谷キャンパス |
| 下段 | 左...旧講堂（辰野金吾工学博士設計）
中...石橋湛山先生（第 16 代学長）
下...現在の大崎キャンパス |

例言

- (1) この図録は平成 19（2007）年 7 月 2 日（月）から 7 月 29 日（日）にかけて開催する第 4 回企画展「立正大学のあゆみ」の展示図録として作成した。
- (2) この図録の編集・作成は、館長の指示により内田勇樹（博物館学芸員）が担当した。
- (3) 展示資料については、立正大学学園の全面的な協力を得た。
- (4) 企画展開催にあたって、特に参考にした文献は以下の通りである。
 - ・発祥四百年 企画編集委員会編『立正大学発祥四百年誌』立正大学同窓会（1980 年）
 - ・大学史編纂委員会『立正大学の 120 年』学校法人 立正大学学園（1992 年）
 - ・立正大学史編纂委員会編『立正大学史資料集』第 1 集 立正大学学園企画広報室（大学史編纂室）（1995 年）

1.立正大学史

立正大学はその淵源を飯高檀林に求めることが出来ます。飯高檀林は、天正 8 (1580) 年に日蓮宗僧侶の教育・研究機関として下総国飯高郷(現千葉県匝瑳市飯高)に創設されました。檀林とは、梅檀林の略で、僧侶の集りを梅檀(ピャクダンの異称。センダン科の落葉高木)の林にたとえ、仏教における学問所のことをいいます。そして、295 年間、諸檀林のなかでも最高所として多くの学僧を世に送り出してきましたが、明治維新によって近代教育に移るなかその社会的役割を終え、明治 8 (1875) 年に廃檀となりました。

日蓮宗では、明治 5 (1872) 年 8 月に従来諸檀林廃止の通達を出し、東京の芝、二本榎の承教寺に日蓮宗小教院(のちに宗教院と改称)を設置し、諸宗に先駆け一宗独立の教育機関を創設しました。この明治 5 年をもって立正大学の創立とし、現在 135 周年を迎えています。その後、明治 37 (1904) 年、品川東大崎の地に 3,000 余坪の土地を購入し、日蓮宗大学林として新たな出発を迎えます。そして、大正 13 (1924) 年 5 月 17 日、大学令に依る「立正大学」の認可があり、同時に財団法人立正大学・同学則も認可され、これにより、専門学校令による日蓮宗僧侶の教育機関であった大学から一般学生も受け入れるようになりました。この時の組織は、研究科・学部・予科の 3 科に分け、学部を宗教学・哲学・社会学・史学・文学の 5 科とし、修学年限を予科 3 年、研究科・学部は 3

年以上としました。また、翌 14 (1925) 年には旧日蓮宗大学を立正大学専門部とする認可を受け、宗教科・国語漢文科・歴史地理科の 3 科を修学年限 3 年として設置しました。

こうして、「立正大学」として新たな発足をし、近代教育が行われていくようになりました。

年号	立正大学略史
天正 8 (1580) 年	下総国飯高郷(千葉県匝瑳市飯高)に日蓮宗僧侶の教育・研究機関として飯高檀林を創設する。
明治 5 (1872) 年	8 月 6 日 教導職制度制定ならびに神仏合併大教院設立に伴い、日蓮宗小教院を東京芝二本榎(東京都港区高輪 2 丁目)に設立
明治 8 (1875) 年	飯高檀林廃止
明治 37 (1904) 年	専門学校令による日蓮宗大学林設立 大崎キャンパス設立
明治 40 (1907) 年	日蓮宗大学と改称
大正 13 (1924) 年	大学令による立正大学を設立 文学部(宗教学科・哲学科・社会学科・史学科・文学科)及び予科、研究科を設置
大正 14 (1925) 年	日蓮宗大学を立正大学専門部と改称 宗教科・国語漢文科・歴史地理科設置
昭和 22 (1947) 年	文学部に地理学科増設
昭和 24 (1949) 年	学校教育法により新制立正大学となる 仏教学部(仏教学科・宗学科)、文学部(哲学科・史学科・国文科・社会学科・地理学科)設置
昭和 25 (1950) 年	文学部に英文科増設 経済学部、短期大学部設置
昭和 26 (1951) 年	私立学校法により学校法人立正大学学園(立正大学・同短期大学部・立正高等学校・立正中学校)に改組 大学院文学研究科設置
昭和 27 (1952) 年	石橋湛山、第 16 代学長に就任
昭和 41 (1966) 年	短期大学部商経科、熊谷キャンパスに移設する
昭和 42 (1967) 年	経営学部設置 熊谷キャンパス開設
昭和 56 (1981) 年	法学部設置
昭和 62 (1987) 年	大崎キャンパス再開発起工
昭和 63 (1988) 年	大学院経済学研究科設置
平成 4 (1992) 年	開校 120 周年 大崎キャンパス再開発竣工
平成 6 (1994) 年	大学院法学研究科設置 昼夜開講制・夜間主コース開設
平成 8 (1996) 年	社会福祉学部(社会福祉学科・人間福祉学科)設置
平成 9 (1997) 年	ユニデンス(熊谷学生寮)竣工
平成 10 (1998) 年	地球環境科学部(環境システム学科・地理学科)設置 大学院経営学研究科設置
平成 12 (2000) 年	大学院地球環境科学研究科設置 大学院社会福祉学研究科設置
平成 14 (2002) 年	開校 130 周年 心理学部(臨床心理学科)設置
平成 16 (2004) 年	総合学術情報センター竣工 大学院心理学研究科設置
平成 19 (2007) 年	大崎・熊谷とも 4 年間一貫教育完成 大崎キャンパスリニューアル工事完成 熊谷キャンパス、リニューアル工事開始

2. 日蓮宗大学林の設立について

安中尚史（仏教学部准教授）

立正大学の淵源をたずねると、近世初頭に設立された日蓮宗の檀林にまで遡ることができる。天正年間(16世紀末)からおよそ100年のあいだに、仏教を教育・研究する機関として、下総（現在の千葉県）と京都を中心に設立された檀林は、近世における日蓮宗の発展に大きく寄与した。しかし、明治維新という大きな改革によって、その歴史に幕が閉じられ、機能は別に移されていった。

近代的な統一国家の形成をめざして神道の国教化をはかった政府は、神仏分離令をはじめとして様々な宗教行政を実行した。明治5(1872)年、政府は神道国教化政策の推進役である教導職を養成するために、大教院を東京に設立し神職と僧侶をここに組み込んでいった。日蓮宗の近代的な教育機関の始まりもこの頃に認められ、同年8月に東京芝二本榎（現在の港区高輪）の承教寺に小教院（後に宗教院）という名称で設立され、その後、甲府・身延・玉沢・小田原・川口などに置かれた。しかし、本来の教育機関としての機能が十分に発揮されるには、少し時間が必要であった。

明治8年5月、政府が宗教政策を転換して神仏合併大教院を廃止すると、仏教各宗派は本格的な教育機関の設立に着手し、日蓮宗においても例外ではなかった。それまでであった東京の宗教院を日蓮宗大教院と改め、教育制度の整備と教育機関の充実がはかれることになった。同年6月、「第一次本山会議」において全国を9教区に分け、第1教区の東京芝二本榎の承教寺に大教院を置き、ほか東京（池上）、静岡、山梨、愛知、京都、大阪、岡山、熊本、新潟にそれぞれ中教院の設置を計画し、その他の地域には希望により小教院を置くなど、段階的な教育体制の確立がはかられた。

その後、明治16(1883)年8月には学科の改正が行われ、翌17年8月11日をもって政府の教導職制度が廃止されたのを機会に、9月12日付で日蓮宗においても教育制度の改革がなされた。この時行われた「第三次本山会議」では、全国を12教区に分け第1教区の芝二本榎に大檀林、第1教区の池上、第3教区の甲府、第5教区の京都に大檀支林を、中檀林が置かれていた教区にはそれぞれ檀林を、そのほかの地域には宗学林が設置された。明治19(1886)年5月には、時代の要請に応じて学科改正が行われ、大檀林に普通学科が設置され、英語、数学、物理などがカリキュラムに加わった。その後、明治25(1892)年には大檀林に予科が設けられ、予科生に対して普通学科目の履修が除外された。明治28(1895)年に教育制度の改正に伴い、全国を3大学区12教区に分け、大檀林を芝二本榎、中檀林を池上、甲府、京都の3大学区に、小檀林を12教区にそれぞれ設置した。

明治36(1903)年6月、「日蓮宗第二次臨時宗会」は教育機関の統一をもって、教育改革と定め、1大檀林と3中檀林を合併して1大学林とし、小檀林を全廃する旨を決議した。さらに、政府の「専門学校令」公布による高等教育機関の拡充がはかられようとする中であって、日蓮宗大学林の設立をこの法令に基づく教育機関として位置づけることが決められていった。

現在、立正大学大崎校舎の建つ地に日蓮宗大学林が開設された理由のひとつに、明治34(1901)年3月9日に池上本門寺で起こった火災がある。先述の通り第1学区中檀林は池上本門寺に置かれていたが、本門寺の火災によって教場・寄宿舎・教場設備及び参考書など全てを失った。その復興処置等をめぐって同月16日、第1学区内学務委員・教区内録司は池上本行寺に集まり、話し合いがもたれた。さらに6月には小伝馬町の祖師堂で開かれた「宗会」において中檀林復興のための善後策が講じられたり、7月から9月にかけても同様の会議が幾たびも開催された。

そのような中で議論に多くの時間が費やされたのは、建設等に関わる経費の問題であった。会議の準備を整える段階において2種類の案が出されていた。第1案として雑司が谷法明寺境内、もしくは池上大坊所有地を借地として利用するものと、第2案として二本榎大久保侯爵の所有地を購入するものであった（第1案12,966円、第2案38,600円）。結果、第2案の土地を購入して建設する案が採択され、さらに資金を捻出するにあたり、日宗火災保険会社の協力を得ることが決定されたのである。この日宗火災保険会社は、日蓮宗信徒で日宗生命保険会社社主河合芳次郎が明治34年に設立した会社で、この会社の株券を購入してもらうことによって、日宗火災保険会社が中檀林に対して資金を貸し付けるという方法がとられた。しかし、当初予定していた大久保侯爵所有地は「竹藪の凹ちを添えたるものにて甚だ思はしからず」というような理由から購入が中止され、小石川区音羽町、本郷区林町、荏原郡大崎、同日黒、赤羽停車場付近稲付村など敷地の選定が始まり、土地

所有者との話し合いの結果、大崎を第1、目黒を第2候補とした。そして同年10月10日、大崎の地に第1学区中檀林の敷地を坪数3,113坪、代金8,940円で購入した。その後、明治35年9月まで日宗火災保険会社の開業が遅れたり、設計の変更や敷地道路の交渉談判などといった事情により、実際に建設が始まったのは同年11月からであった。

このように第1学区中檀林が池上から大崎の地に移り建設される中で、日蓮宗の教育制度・機関に変化が起きようとしていたことに、もうひとつの理由が見いだせる。この発端は明治34年2月、同年6月7日から行われる日蓮宗の「宗会」議案として檀林制度改正に係る「中檀林合併」「小檀林組織変更」「大檀林学科改正」の3点が決定されたことにある。またこの頃、日宗青年同志会という組織が、教育制度の刷新をはかるための改正教育案が発表されていた。しかし、明治34年6月7日から18日まで開催された「宗会」では、教育制度の改正に多くの意見が出されはしたが、中檀林復興のための善後策と相俟って結論には達し得なかった。その後も幾度となく議論がたたかわされるものの、容易に解決することはなかったが、明治36(1903)年6月9日から15日にわたって開催された「宗会」において結論を見た。

それは、3中檀林1大檀林の現制度を1大学林とし、専門科・高等科・中等科の3科を併置し、さらに高等科の分教場を京都に設け、各地の小檀林を全廃することで協議がまとまった。また大学林の校舎については第1学区中檀林校舎並びに敷地を第1学区が日蓮宗に献納することとなった。ここに中檀林の復興と日蓮宗の教育改革が、大崎の地に建てられる新たな学舎をもって結実を果たした。ちなみに本学の創立記念日が6月15日に定められたのは、この明治36年6月15日に閉じられた「宗会」をもって、大崎の地に大学林設立が決定されたことにあるようだ。

その後、明治36年8月19日、600坪に及ぶ校舎は落成し、翌明治37年4月1日に日蓮宗大学林開林式を挙行し、4日より9日まで入学試験が行われ142名の入学者をむかえた。また、先にも述べた通り、政府の「専門学校令」に基づく教育機関として手続きがとられ、明治37年4月2日付「文部省告示第81号」をもって設立認可された。

日蓮宗大学林に限らず、明治36年に定められた「専門学校令」に基づいて設立認可された教育機関は、そのどれもが「大学」という名称を用いていた。この頃の正規の「大学」とは東京帝国大学をはじめとする官立のみで、宗教関係の学校に限らず、私立の「大学」は大学の名称を使用しているも専門学校の枠の中に甘んじていた。しかし当時の専門学校の中には、その内容が官立大学に対して何ら遜色はなく、むしろ官立大学よりもすぐれていたものもあり、私立大学のあいだには進んで官立同様の大学となるべき働きかけをするか、専門学校の枠を越えずに現状を維持するか、という問題が生じてきたのであった。

政府も官立大学だけでは、益々増大しようとする大学志願者の受け入れが困難になり、大学の予備門としての機能を果たしていた高等学校の入学者定員を減らすことを考えていた。そのため大学教育に関する問題は頻繁に論議され、ふたつの意見が出されるに至った。一方は私立大学を官立大学同様に取り扱うという意見であり、他方は大学とは学術研究の蘊奥を極めるところであるから数多くを必要とせず、それよりも大学と称している専門学校の修学年限を短縮することによって、社会の要求する人物を造り、入学難を緩和するほうが当時の社会的情勢に適応した教育策であると考えた。

明治40(1907)年、日蓮宗大学林は学則の変更とともに日蓮宗大学と改称した。さらに創立10周年をむかえた大正2(1913)年に、教育制度の刷新をはかるために日蓮宗内に教育制度調査会が設けられ、大正5(1916)年に修学年限などが見直された。その後、火災による校舎等の焼失によって大学移転問題が起こり、大正7(1918)年に発令された大学令と相俟って、日蓮宗大学内に大きな問題を投げかけることになるのであった。結果的には元の場所に校舎を新築することで移転は無くなり、さらには教育研究機関としての内容の充実はもちろん、官立大学と同等の待遇と社会的評価の向上とともに、他宗派に遅れをとらないためという理由もあって、大学令に基づく教育機関の設立に着手したのである。

かくして大学令発布から足掛け6年の歳月を経て、大正13(1924)年、立正大学と名称をあらため、文学部(宗教科・哲学科・史学科・国文科・社会学科)・予科・研究科を擁して新たな一步を踏み出したのであった。

3 立正大学校歌について

山下正治（文学部教授）

立正大学校歌については「立正大学校歌の周辺」(『LOTUS』第14号 1980年)で詳しく述べたことがある。『立正大学 専門部宗教部第1回卒業記念』アルバム(昭和3年3月)に校歌が載っているが、これには作詞作曲者の名はない。次いで『第3回 記念写真帖 立正大学高等師範科 国語漢文科』(昭和5年3月)のものに、はじめて「境野正先生作歌 室崎琴月氏作曲」と、作詞者・作曲者の名まえが出てきている。現在、学生手帳その他のところで校歌が紹介され、作詞者・作曲者の名まえが紹介されているのは、この第3回卒業アルバムの記事に由るものである。また琴月氏が長く保管されていたパンフレットがあり、大正13年6月15日より4日間、盛大におこなわれた「昇格と新築落成及び創立廿年祝賀会」の際に配布されたものと確認できる。この祝賀会については「大崎学報」66号(大正14年4月)に詳しい。そして、このときから「立正大学校歌」として、全教職員、学生が親しんできたのであった。「立正大学」という名称のもとに校歌が制定されたのは、大正13年のことであり、6月15日の昇格記念祝賀会の日をもって為されたとして、ほぼ間違いなさそうである。現在、大学の学年暦等には、6月15日は創立記念日と定められているが、これは、明治37年に設立が決定された日であり、昇格の祝賀も、その日に因んだものであった。



作曲者 室崎琴月氏

室崎琴月氏は、「ぎんぎんぎらぎら夕日が沈む……」で広く親しまれている童謡「夕日」の作曲で知られ、明治24年2月20日、富山県高岡市木船町に生まれ、東京音楽学校(現東京芸大)本科ピアノ科で学ばれ、卒業後の大正8年中央音楽学校校長となり、この頃から立正中学へ音楽教師として出講されたといわれている。



作詩者 境野正氏

境野正氏は、明治11年1月、熊本県天草郡天草町大江に生まれ、明治33年7月第五高等学校(熊本)卒業後、東京大学国文学科に学ばれ、卒業後明治37年4月から立正大学へ出講されている。専門分野は、源氏物語を中心に伊勢物語など平安期のものであり、他に歌論や俳論も学ばれていた。

校 歌

一

見よ東海あかの芙蓉つばき時
あかねさす陽に映ゆる時
無明の既登あかますべく

二

前聖まへすでに鏡を垂る
後生あき起つにおくれむや
同胞どうのため世の爲に
捧げまわらむ身をも

三

命いのちも身を捧げよむ
かざす立正りっせい徳邪とくじの剣
掛つる理想りっせいの蒼風そうふうに
四海しがいをなびけ久遠くゑんに
本時の春ほんじをたへなむ

校 歌

境野正作歌

校 歌

室崎琴月作曲

1. 1 1 | 1. 2 3 | 5. 3 4 5 | 6. 0 |
1. い り と っ か い の フ コク一ホカ一
2. ぜん しゃ す で に は ん を た る
3. か ず す り っ しゃ は げ の けん

3. 3 3 | 3. 2 5 3 | 2. 3 1 6 | 5. 0 |
ア カ ネ ト サ ト ハ ニ ル ト キ ヤ
コ ー ヌ エ ヒ ニ オ ハ ヌ ル ト キ ヤ
ク ラ ム ツ ヲ ノ ハ マ ヌ セ

6. 7 1 6 | 5. 5 1 | 7 1 2. 5 | 3. 0 |
ム 1 っ フ エ 1 リ マ ヌ ス タ め
レ カ イ ラ ナ ナ め ト コ シ ニ

5. 3 6 5 | 5. 5 3 | 2 3 6. 5 | 1. 0 ||
ヤ ヤ マ カ ヲ カ ネ ナ ル も
さ さ じ つ っ ち たい ち へ

室崎琴月氏が保管していたパンフレットに残っていた校歌の歌詞と曲
(図及び写真は、山下正治「立正大学校歌の周辺」『LOTUS』第14号 1980年より転載)

4.立正大学のあゆみ

大正13年に「立正大学」として新たな出発を果たしましたが、時代は日清・日露戦争、太平洋戦争へと動き、講義の中にも“軍事教練”として大正14年より中等程度以上の男子学校に陸軍現役将校を配属して行われた軍事に関する訓練も入れられようになりました。その後、戦局が厳しくなると立正大学の学生も横河電機・赤羽兵器廠・立川飛行場・月島軍需工場等に動員されました。

昭和18年9月、東条内閣は理科系・教員養成系以外の大学・高専在学生の徴兵猶予を停止（10月公布）、10月21日には明治神宮外苑競技場で出陣学徒壮行会が行われ、12月1日第1回学徒兵が入営しました。昭和20年8月15日、終戦をむかえると、経済状況の不安定の中、昭和24年には新制立正大学の設置認可を受け、仏教学部（宗学科・仏教学科）・文学部（哲学科・史学科・国文学科・社会学科）を設置しました。翌年、文学部英文学科を増設、経済学部を設置し、12月大学令の廃止によって旧制立正大学文学部が廃止になりました。昭和26年2月には財団法人立正大学を改め、学校法人立正大学学園（立正大学・同短期大学部・立正高等学校・立正中学校経営）として組織変更の認可を受けました。また、3月には専門学校令の廃止にともない立正大学専門部を廃止し、そして4月に立正大学大学院文学研究科修士課程の設置の認可を受け、総合大学への一步を踏み出しました。

昭和30年代後半になると、第1次ベビーブームや進学率上昇などで大崎校舎だけでは手狭になるほど学生数が増加し、新たに熊谷校舎の建設が始まりました。昭和40年1月から第1期工事が始まり、第3期工事を経て昭和41年に短期大学部商経科が移設され、昭和42年4月に熊谷校舎において第1回入学式が行われ、立正大学の新たなキャンパスがスタートしました。



軍事教練の練習の様子



出兵日章旗

吉田格氏（立正大学専門部高等師範科昭和16年12月卒）は、立正大学博物館所蔵である縄文文化資料（吉田格コレクション）を寄贈された方で、在学時から考古学研究を推進されて来られた。この旗は、吉田格氏が昭和17年2月に応召、歩兵第42連隊（鳥取）に入営される際に、考古学界の著名な人々（長谷部言人・後藤守一・甲野勇・藤森栄一・直良信夫・八幡一郎・山内清男など16名）によって寄せ書きがなされたものである。



旧1号館



旧図書館



旧校旗



旧校章旗



第16代学長 石橋湛山

石橋湛山先生は昭和27年から昭和43年までの16年間という長期にわたり、立正大学学長を努められました。

「日本のケインズ」と称された石橋湛山先生は、立正大学の総合大学化を目指し、建学の精神をよりわかりやすく具現化されました。また、当時開設されたばかりの経済学部の強化を図られました。石橋先生は生涯にわたり自由主義と

民主主義に基づいて、ジャーナリストとしても絶えず時代をリードする健筆をふるってこられました。そして昭和31年に第55代内閣総理大臣に就任され、日中・日ソ相互の国交回復のために自ら先頭に立ち、熱心に行動されました。しかし体調不良のためわずか65日という短い期間で自ら辞職されました。



現在の熊谷キャンパス



現在の大崎キャンパス

現在立正大学は135周年を迎え、大崎・熊谷とも4年間一貫教育になりました。熊谷キャンパスの再開発事業が始まり、大崎キャンパスも順次施設の増改築が進み、新たな転換期を迎えています。

8学部14学科7研究科からなる総合大学へと発展し、様々な分野で活躍する人材を輩出しています。

第4回企画展 立正大学のあゆみ

編集・発行 立正大学博物館

発行日 平成19年7月2日

〒360-0194 埼玉県熊谷市万吉1700

TEL:048-536-6150/FAX:048-536-6170

E-mail: museum@ris.ac.jp

URL: <http://www.ris.ac.jp/museum/>

印刷:株式会社 ウエタケ